

テレビと私

高取 弘子

家にテレビが来た。六歳を迎える春に。七五三祝いの晴れ着の替わりにテレビを熱望した私に、祖母、両親が（渋々？ 喜んで？）賛同してくれた。

それまでは金曜日の夕刻に従兄妹の家まで『チロリン村とクルミの木』を観る為、通っていた。黒柳徹子さんが声優のピーナッツのピーコちゃん、玉ねぎのどん平ちゃん、カボチャのおとつあん等の野菜たちとクルミのくるこちゃん、頑固じいーさんのお金持ちの果物たち、スカンクのガスパやコウモリの獣たちが織り成す指人形劇。「めしべ」と「おしべ」の温泉もあった。金曜日が待ち遠しかった。当時はNHKと民放テレビ二、三しかなく、中には放送休止の時間があった。

それからはテレビが生活に必須となった。幼稚園前にマンガ(アニメ)の『ヘッケルとジャツケル』——毎回いたずらカラスが暴れまくり最後には羽根をもがれて逃げていく話。週一回、夜に三本の放送あり。他のアニメに『マイティーマウス』——スーパーマンのネズミ版。いたずらネズミのコンビ『チュースケとチュータ』、『珍犬ハツクル』等々。

米国のホームドラマ、『名犬ラッシー』——コリー犬と少年、続編も有った。竜巻が来て床下の地下室に避難する場面、ドキドキした。『パパはなんでも知っている』——白い大きな冷蔵庫に大きな牛乳瓶が入っている光景に子供ながらも豊かさを感じました。セオドア・クリーパー坊やの愛称の『ビーバーちゃん』——パパ、ママ、ウイリーお兄ちゃまと繰り成すドラマ。ウイリーの友達エディにビーバーちゃんがかかわれてました。長寿番組だったから、終盤はかなり成長していた。そして、そし



て、『スーパーマン』——プロローグ「そうです。スーパーマンです。遠い星から地球にやって来た奇跡の男。空を飛び、鋼鉄をひねる位、朝飯前。彼はクラーク・ケントと名乗り、メトロポリスの新聞社『デリーブラネット』の記者となって、日夜、戦い続けているのです」。星条旗の前でポーズ。『ちびっ子ギャング』も痛快だった。

『鉄人28号』、『鉄腕アトム』の実写版、バッチリ観た。主題歌「僕は無敵だあ、鉄腕アトム。良い子の為に戦うぞ。勝ったつもりか、負けはしないぞ。さあ来い悪者、ドンと来い。ジェット・エンジン10万馬力、僕は鉄腕アトム。七つの威力を持っている」。その他、『快傑ハリマオ』、『白馬童子』、『少年ジェット』、『まぼろし探偵』、『月光仮面』。小学一年生の砌、黒板前にズラツと並んだ男子の横で月光仮面の絵を描いた。先生から「男子は落書きするな」、私には「女の子はそんな絵を描くな」と注意を受けた。

その後、『事件記者』は正座して鑑賞した。三浦綾子の『氷点』については、数年前に旭川の記念文学館に行き、改めて感動。『夢千代日記』『北の国から』等々、枚挙に遑が無い。

大事な思い出番組が漏れていたり、記憶違い、大きな誤解等、有るかと思うが、記憶を辿り、思い付くままに。

